

## 荒木村重の戦いと尼崎城

天野 忠幸

### はじめに

戦国時代中期、京都を支配した細川高国は永正一六年（一五一九）と大永六年（一五二六）に、上洛を目論む阿波の細川澄元・晴元親子に備えるため、大物に尼崎城を築城した。

しかし、尼崎城がその機能を最も発揮したのは、高国と澄元・晴元親子の戦いの時ではなく、荒木村重と織田信長が戦った時であった。

戦国時代に摂津で最大の勢力を誇った池田氏より、池田姓を与えられ一門として遇された荒木村重は、主家の池田氏が力を失っていく中、北摂に勢力を伸ばしていった。そして、織田信長と將軍足利義昭が対立した際に信長へ味方し、天正三年（一五七五）には淀川以北の摂津を支配下に

収めた。そして、村重は伊丹城を有岡城に改名して自らの居城とし、息子の村次を尼崎城に、一族の元清を花熊城に配置した。

ところが、村重は天正六年に信長を見限って挙兵した<sup>(1)</sup>。村重方は籠城策をとったが、足利義昭や毛利輝元、本願寺顕如や雑賀衆からの援軍や補給があつたこと、摂津西部の百姓も村重と共に蜂起したこと、周辺の丹波の波多野秀治や赤井忠家、播磨の別所長治や小寺政職<sup>まさむね</sup>も信長と戦つたことにより、戦いは長期化していった。

そうした村重と信長の戦いにおいて、尼崎城の果たした役割を見てみたい。

### 一、村重の尼崎入城

天正六年（一五七八）一〇月、荒木村重は有岡城に籠城した。一月上旬には、毛利氏に人質を送り、同下旬には毛利氏からの援軍が摂津にやってきた。翌天正七年正月には、雑賀衆からの援軍もあつた。東国の武田勝頼も村重の挙兵に大きく励まされていた。

しかし、五月頃より毛利輝元がなかなか出陣しないことに、村重や雑賀衆は不安を抱き始める。そして、どうとう

村重は有岡城から尼崎城へ移った。『信長公記』九月二日条に「荒木摂津守、五・六人召列、伊丹を忍出、尼崎へ移り候」とあり、村重が有岡城の妻子や家臣を見捨てて単身で逃亡したと後世評価されるようになった行動である。

しかし、この『信長公記』の記述は正しいのであろうか。村重が信長に味方した際、既に摂津北部を支配していたが、『信長公記』は「一僕の身」である村重を信長が取り立てたのに「身程を顧みず朝恩に誇り、別心を構へ候」と、事実ではない記述をしている。

村重が尼崎城に向かった様子を明らかにするのが次の史料である。

尚々御人数之事、先早々奉待候、為之如此候、

急度令啓候、仍於三木表被得大利之由風聞候、於必定

ハ御手柄不及申計候、随而敵今朝未明ニ此表へ取寄候、

中將殿も自身被動、即小屋以下をもち申候、就其此方

人数漸御前衆かけて六・七百計立候事、無人と察候条、早々

御人数被差返候て可給候、(伊丹)いたみ九兵よりも被仰越候、

御油断ニてハ曲有間敷候、其上□一刻も早く先至花熊、

御上奉待候、委細日志可申入候、恐々謹言、

荒撰

(天正七年)  
九月十一日

村重(花押)

(乃美宗勝)  
乃兵

参 御陣所

(乃美文書)

尼崎城に入城した村重は、毛利水軍の中心である乃美宗勝に対して書状を送った。まず、毛利氏の援軍が、別所長治が籠る播磨の三木城へ兵糧を搬入しようとした九月一日の大村の戦いについて記し、毛利方が羽柴秀吉を破ったとして、その勝利を大いに称えた。

しかし、摂津では有岡城を囲んでいた織田方の軍勢が、信長の嫡子である織田信忠自身に率いられて尼崎城に攻め寄せ、包囲するために小屋を築いた。こうした織田方の軍勢に対して、尼崎城の軍勢は村重が有岡城から率いてきた御前衆も合わせて六百から七百に過ぎず、「無人」であると窮状を訴える。

その上、毛利方は尼崎城に派遣していた援軍を本国に撤退させていたようで、村重は早く尼崎城に引き返すよう求めた。村重は既に伊丹九兵衛という家臣を宗勝に遣わしたが、一刻も早く毛利方の援軍を追加で花熊城へ派遣するよう、新たに日志という使者を遣わして、宗勝に求めている。

村重は同日に雑賀衆の中村左衛門九郎と武田四郎次郎にも援軍を求めている。<sup>(3)</sup>すなわち、村重が有岡城から尼崎城に移った理由は、単身で逃亡するためではなく、毛利氏や雑賀衆の援軍を得て劣勢な戦況を立て直すためであった。

## 二、村重の戦略

『乃美文書』によると、荒木村重の尼崎城入城は、『信長公記』に記されたような数名で秘かにではなく、数百の御前衆を率いて有岡城の包囲網を突破するような形で行われたようだ。

それまでも村重は、五月七日や六月四日に毛利氏家臣の桂元将に対して、有岡城から援軍を催促する書状を送っている。どうして九月には、村重自身が尼崎城へ向かったのであるうか。それは、乃美宗勝に宛てた書状にあるように、尼崎城が有岡城より先に落城の危機に瀕していたからである。おそらく、毛利輝元は三月に織田方に寝返った宇喜多直家に備えるため、摂津に派遣していた援軍を安芸に呼び戻したのであろう。

尼崎は大阪湾に面した港町であり、毛利氏や雑賀衆の援軍の上陸拠点であった。その尼崎城が落城すれば、内陸部

の有岡城や大坂本願寺への補給も途絶え、落城は必至である。村重は尼崎城を維持するため、御前衆を率いて尼崎城に入り、撤兵した毛利方の援軍の欠を補ったのである。

輝元は村重を支援するため、家臣の湯浅・末国・細川・六戸・桂・三上・乃美・粟屋・河田・甲田・磯兼・平賀・木下・児玉・大多和氏らを、尼崎城や花熊城に派遣している。<sup>(4)</sup>また、毛利水軍や村上水軍は木津川口の新海戦で織田方の九鬼水軍に敗れたが、明石海峡や兵庫津・尼崎沖の制海権を確保していた。尼崎城を中心に戦線を再構築しようとした村重の戦略は、一概に誤っていたとは言えない。

しかし、城主がいなくなった有岡城では城兵の士気が低下し、織田方の滝川一益の調略によって寝返る者が現れ、落城してしまった。このため、村重の戦略は破綻した。

有岡城を落とした信長は、捕虜にした有岡城の女・子供・家臣たちを人質として、村重に尼崎城と花熊城の明け渡しを迫った。しかし、長島一向一揆や播磨上月城に象徴されるように、信長や秀吉は開城させた後にその非戦闘員を虐殺したため、村重が応じることがなかった。このため、信長は京都の六条河原と尼崎の七松で有岡城の人質たちをみせしめのため処刑した。

ところが、尼崎城や花熊城の城兵の結束は全く揺るがず、見せしめの効果は全くなかった。信長の戦略も破綻し、単なる憂さ晴らしに終わったため、江戸時代には太田錦城の『梧窓漫筆』などに、信長の残虐さの象徴として、荒木一類の処刑が挙げられている。

尼崎城と花熊城は、天正八年三月に本願寺頭如が信長と和睦し大坂を退去した後も、七月まで戦い抜いた。

## おわりに

荒木村重と織田信長の戦いでは、前半の有岡城の攻防のみが注目される。しかし、後半の村重が在城した尼崎城にも注目すると、戦争は広域化し籠城戦の長期化やそれを支える兵站の確保が重要な課題となっていた。そのため、物資の大量輸送に適した海岸部の尼崎城の有効性が認識された。

大坂城の築城を開始した羽柴秀吉は、天正一一年かその翌年の天正一二年の一月二一日に、増田<sup>ました</sup>長盛より具申された「尼崎普請」を松浦重政に命じている。<sup>(5)</sup> その一方で、有岡城は廢城となった。また、徳川秀忠は、大坂城を防衛するために譜代大名の戸田氏鉄<sup>うじかね</sup>を尼崎藩主とし、新たな尼

崎城を築城させた。尼崎城を重視した村重の戦略は、後世に継承されたと言える。

## 〔注〕

- (1) 荒木村重をめぐる動向については、天野忠幸「荒木村重の摂津一職支配と謀反」(同『戦国期三好政権の研究』清文堂出版、二〇一〇年)と同「荒木村重と織田政権」(『地域研究いたみ』四〇、二〇一一年)を参照。
- (2) 『新熊本市史』史料編二「所収、写真により一部訂正。
- (3) 『伊丹市立博物館所蔵文書』(『荒木村重史料 伊丹資料叢書四』では豊中市服部天神所蔵)、尚々書を除く本文は「中村家文書」として『紀伊統風土記』付録六に写収録(『和歌山市史』四)。
- (4) 土居聡朋・村井祐樹・山内治朋『戦国遺文 瀬戸内水軍編』(東京堂出版、二〇一二年)
- (5) 上田稷「水野家文書について」(『研究紀要』九、大阪市立博物館、一九七七年)